陳情第７号

芦屋市長選挙で「対話」を強調した伊藤舞市長が、芦屋市議会において議員の再三の求めにも関わらず、一般質問において自ら答弁しない件については、議会制民主主義と二元代表制を冒涜するものであり、伊藤舞市長に議会として是正を促すことについての陳情書

陳情の理由

伊藤舞市長は、本年４月の市長選挙において、ＯＰＥＮ芦屋を標榜し、街頭演説においても度々、市と市民の対話を進めようと、対話の必要性を訴えてきた。対話・熟議は民主主義の発展において土台であることは間違いなく、対話の必要性を強調する姿勢については評価する。しかし、伊藤舞氏が、芦屋市長に就任して以来、自身が芦屋市長として議員を招集しているのにも関わらず、芦屋市議会における態度は、議会制民主主義を冒涜するものである。

それは、議員の一般質問において、議員が、伊藤舞市長本人に複数回にわたり答弁を求めたにも関わらず、副市長に答弁させていることである。副市長はあくまでも市長の補助機関にしか過ぎず、市民の信託を受けたわけではない。伊藤市長の態度は、議会制民主主義や二元代表制を全く理解出来ていないといっても過言ではない。そもそも主権者たる日本国民たる芦屋市民から信託を受けているのは、芦屋市長だけではなく、一般質問に立っている芦屋市議会議員もその信託を受けている。そして、その信託を源泉に議員には、質問・質疑権が付与されているのである。共に芦屋市民の代表である芦屋市長と芦屋市議会議員が、芦屋市議会の場において、芦屋市政について「対話」する機会の一つが一般質問であるのに、自らの口で答弁をしないという伊藤市長の態度は、「対話」を強調した選挙戦の態度とは矛盾しており、ダブルスタンダードも甚だしく、伊藤市長は、猛省すべきである。

陳情者である当時大学生の私が、芦屋市議会議員に初当選したばかりの伊藤舞氏に保守系会派の控室内で会った時に、「なぜ議員になったのか」と問うと、「私は母が議員をやっていたから選挙にでて議員になったから、わからない」旨を答えた。この程度の者が、芦屋市議会議員なのかと大きな衝撃を受けたが、市長になっても尚、成長していないと見受けられる。

本来であれば、このような事態に、革新左派政党の議員が民主主義の危機だと糺すかと思ったが、伊藤市長の実質与党になったのか、その様子が全く見えてこない為、以下、陳情する。

陳情の項目

１、伊藤舞市長は、副市長以下市職員は、自身の補助機関であることを認識し、議員が答弁を求めた際には誠実に受け止め、自らの口で答弁をするよう、芦屋市議会として促すことを求める。

令和元年９月25日

芦屋市議会議長 中島健一 あて

陳情者住所 神戸市東灘区住吉本町[redacted]

氏名 上畠寛弘[redacted]

芦市議議 受
第 40 号
1.9.26
分類